

2017年度 地域イノベーション研究センター事業報告書

巻 頭 言

「地域の価値とは何だろうか。」この問いを、私はセンター長になる前から考えてきました。もともと私の研究領域は、海洋微生物学と微生物生態学です。それも分子(DNAやタンパク質などの生体分子)を用いて、海を含む水域全般の微生物の生き様を解き明かす研究を過去30年間行ってきました。そもそも学者という存在は、普通の人々が見ない世界を専門の知力や技量、経験をもとに見ていく存在なのですが、それでも動植物を対象とする動物学や植物学、経済活動や文芸作品を対象とする経済学や文学などとは異なり、肉眼では見えない微生物を対象としてその自然界での生き様を見ようとする酔狂な学者は、どちらかというに変人です。だからこそ一生をかけても良いと覚悟を決めて取り組んできたわけです。

しかし今になって考えてみると、私の微生物学者としての経験が最初の問いについても私なりの答えを得るための素地になったような気がします。普通(特に現代では)「価値」というと目に見える指標、端的に言うと通貨的な価値を単位として、その多寡を比較するのが一般的です。しかし、多くの人々がおそらく一生意識しないか、したとしても「ばい菌」として「なんかわからんけどあまり好ましくない存在」として捉える微生物を研究してきた私の考える「価値」はそれとは異なります。私の考える「地域の価値」とは、風土、つまり自然環境に基づく社会や文化の総体の中で人々が生きていく価値です。個々のパーツごとの価値、この場合は経済力や文化的価値などの通貨指標によって一般化しやすい価値ではなく、その組み合わせの中で生きていく全体の価値です。簡単にいうと、「そこで生きていくことが好ましいかどうか。」という価値観です。

国の価値を、国民総生産(GNP: Gross National Production)ではなく、国民総幸福量(GNH: Gross National Happiness)で評価しようと考えた国があります。ブータンです。ブータンではGNHの項目として、1. 心理的幸福、2. 健康、3. 教育、4. 文化、5. 環境、6. コミュニティー、7. 良い統治、8. 生活水準、9. 自分の時間の使い方、の9項目を挙げ、その全体向上を国の目標としています。この考え方はまさに、私の考える「地域の価値」と一致します。

現在の日本は様々な問題を抱えているのですが、特に「少子高齢化」や「都市一極集中」、そして「地域の疲弊」に関してはその原因として「地域の価値基準が都市化、グローバル化したこと」に一本化できるのではないのでしょうか。そうするとその解決策は、「地域の価値を地域総体として再確認し、その向上を目指すこと」に尽きるのではないかと考えます。鳥取の置かれた現状を考えると、まずは「鳥

取に住む人々のGNHを向上するにはどうすればよいか。」から考え始めてはどうでしょうか。私が見るところ、鳥取の価値は東京を下回るものではないと思います。公立鳥取環境大学地域イノベーション研究センターとしては、「総体としてのGNH、つまり地域価値をさらに向上し、鳥取での生きがいに資する研究や活動」を目指していきたいと考えている次第です。

さて、この報告書は、平成29年度（2017年度）の本研究センター研究員による6件の研究・活動の記録です。高齢者の買い物実態やサイエンスカフェなどは、この地域の生活の質の向上に資する研究や活動です。また、シカによる森林被害や海域の藻場植生と海洋生物の関係は、この地域の自然資本の価値を維持・向上するための基礎研究です。下水汚泥からのエネルギー回収は、未来の地域エネルギー、これも地域の生活の基盤に必須な要素です。土壌有機物代謝に関する研究は、鳥取固有の土壌、つまり水はけのよい砂質と水分を保持しやすい火山灰由来の泥土を鳥取の農業の個性ととらえた、まさに他の地域には無い鳥取固有の地域価値につながるのではないかと考えます。この報告書をご覧になった読者の皆さんには、あらためて自分の身の回りの鳥取の地域の価値に考えを及ぼしていただき、我々には見えていない価値をぜひ教えていただけたらと、心より希望いたします。

平成30年3月

地域イノベーション研究センター長 吉永 郁生